國學院大學学術情報リポジトリ

2019年度国際研究フォーラム「21世紀における国学研究の新展開国際的・学際的な研究発信の可能性を探る」報告書

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2025-05-14
	キーワード (Ja): NDC8:121.52, 国学‖コクガク
	キーワード (En):
	作成者: 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001624

コメント・総合討議

それぞれの発表終了後、林淳氏（愛知学院大学・教授）、一戸渉氏（慶應義塾大学・准教授）、桐原健真氏（金城学院大学・教授）から個別発表に対してコメントが行われ、それに対するリプライの後、討議が行われた。以下はその概要である。

1、コメント

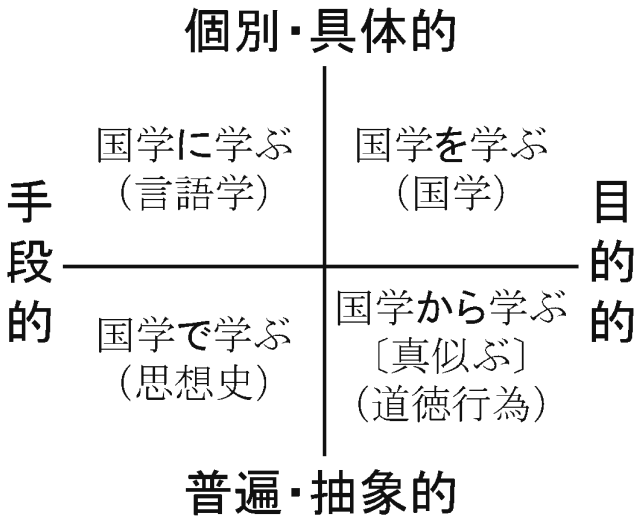
近世の陰陽道と近代の仏教を専門とする林淳氏は、松本氏によるシンポジウムの趣旨説明に触れつつ、20 ～ 30 年前と比べると近代前期が過去として歴史化され、若い研究者や学生が近代をやるようになったと述べ、近世と近代に安易な連続は作らない方がいいということを指摘した。また、国学を近代に出てくる政治的ナショナリズムの源流としてだけでなく見るためには、ナショナリズムを文化的ナショナリズムと政治的ナショナリズムに分けた方がいいのではないかと問題提起した。

続いて、個々の報告へのコメントとして、ベンテリー氏に対しては、言語学・日本語学を広くすれば宣長がやったことも入ると解釈すればよいのか、それとも宣長たちがやったことは言語学とは次元が違うが、媒介項や翻訳を通じて日本語学でも通用する議論ができるのか、関係性を問うた。裵氏には、宣長が近代ナショナリズムにつながらないことは否定しないが、十分文化ナショナリズムではあるとコメントしたうえで、文化ナショナリズムにおいては江戸でも朝鮮でも中国の影響力が大きく、18 世紀の実学は根本では中国語や中国の教養を基にしているのではないかと質問した。蔣氏の報告については、天祖をアマテラスに一元化していくことと民の心を一元化していくことがパラレルであり、学問的な営為から「国体」が出現する瞬間になったのではないかという解釈の正否を求めた。オカ氏に対しては、松尾多勢子や黒沢時子、野村望東尼といった尊王攘夷派の女性知識人を挙げ、なぜ尊王攘夷派という領域の中では女性が知識人化できたのか、それ以前はできなかったのかということと、高等教育が存在しない江戸時代において、そもそも知識人とは何なのか、制度に裏付けられない知識人が存在しうるのかという二点を投げかけた。

次に、日本文学・国文学を専門とする一戸渉氏は、自身が「国学」に研究対象としてどう向き合っているのかという話題で、議論の材料提供を行った。まず、一戸氏は、最初に藤原氏から触発されることが多かったとして、「国学」の英訳に触れた。どの訳語も帯に短し襷に長しで、ローマ字で“*Kokugaku*”とするほかない翻訳不可能性がある。今回は諸分野の研究者が集まったが、研究同士がつながるわけでもなく「国学研究者」という不思議な状況で、それは近世国学が非常に幅広く、雑多で捉えがたいことに起因することを指摘した。そのような国学の捉えがたさ、雑多さは國學院大學日本文化研究所で長年議論されてきたことで、「和学」や「日本文化学」といった言い方もあるように、「国学」という

言葉が一つの確定した意味内容しか持たなかったわけではない。階層ごと、集団ごと、個人ごと、ジェンダーごとの国学がありえたのであり、例えば会津藩の藩校で教えていた沢田名垂は「和学」の語を用い、ひたすら古代を理想化して重んじるのではなく、武士の子供に教えるのには一般的な国学者がないがしろにするような『吾妻鏡』など武士の教養も大事だと述べている。「復古」ということをとっても、朝廷が目指したのは王朝文化の和漢兼修であり、宣長のような漢意の排除とは親和性が高くない。近世においては、武家・公家など様々な階層が複数の「復古」を目指しており、時期によっても様々な多様で捉えがたい、ローマ字で“*Kokugaku*”というしかないような「国学」の営みがあった。その多様性をどう受け止めて近世の研究に活かすかが課題であることを指摘した。

そして、吉田松陰を中心に思想史を研究している桐原建真氏がコメントを行った。まず、桐原氏は「個別具体的と普遍抽象的」「目的的と手段的」という軸に基づく四つの象限で以下のように国学研究を分類した。



「個別具体的」は国学者の言説・テキストそのものの検討を、「普遍抽象的」は国学にとどまらないコンテキストへの展開を意味している。「目的的」とは国学という体系の確立を目指すのに対し、「手段的」とは別の学問体系に役立たせることを指している。

第一象限、目的的で個別具体的な「国学「を」学ぶ」は国学そのものの体系樹立を問題意識とするものであり、松本氏の発表や、新国学などの試みが当てはまる。

第二象限は手段的で個別具体的な、先行研究としての「国学「に」学ぶ」ものであり、ベンテリー氏の発表が位置する。

第三象限、手段的で普遍抽象的な「国学「で」学ぶ」は、国学や国学者を通してその時代を描きだすものであり、裵・蔣・オカ・藤原の四氏が入る。

第四象限、目的的で普遍抽象的な「国学「から」学ぶ」、国学や国学を真似ていくという区分には該当するものがないが、松陰の国学に対する態度や、戦前の国体学・国民精神文化研究所の一部はここに当てはまることを指摘した。

他に桐原氏は、近代以降の文脈からすれば国学には特権的な地位があったように見えるが、近世社会という儒学が優位的な地位を持った特殊な学術状況においてはあくまでも市井の学問であったことを指摘した。また、近代における国学の叙述や、新国学の可能性に触れた。

2、リプライ

上記のようなコメントを受けて、それぞれの発表者からリプライがなされた。

ベンテリー氏は、林氏からのコメントに対し、国学と現在の科学的観点の差異を認めつつ、宣長の鋭い分析力を把握し、私たちの言語学と比較すべきことを述べた。また、国学と言語学との関係については一戸氏が、国学者は必ず和歌を創作することから、歌学と言語学に密接なつながりがあるということを補足した。

裵氏は、林氏に対し、文化ナショナリズムとしての位置づけや中国に対する極めて強い意識は肯定したうえで、朝鮮も日本も中国から距離をとっていた面もあるとして、漢訳を介した西洋の文献や、蘭学･洋学といった、直接的な中国の関与とは異なる点を指摘した。

蔣氏は、林氏が提示した、天祖の一元化と人心の一元化がつながるという解釈を認め、会沢は天祖を中心とするものとして構築される神代の秩序を、祭祀というイベントを通じて人間の時代に継承しようと考えていたのではないかと述べた。

オカ氏は、林氏からの質問に対し、近世において女性の枠があまりないなかで尊王攘夷の女性だけが紹介される要因として、天明期に生まれた真葛とは時代が異なり、平田家のビジネスモデルがあったことを挙げる。そして知識人については、彼女たちも歌人や篤学の政治運動者には入るかもしれないが、学問的な枠に入るのが難しいということを指摘した。

3、討議

司会の遠藤氏は、松本氏の基調講演で言及された吉田松陰に関して論点を整理し、松陰に国学を尊重する意図があったのか、死の直前、宣長や篤胤の著作を読むよう弟子たちに勧めたことにはどのような意義があったのか、ということを、国学の輪郭にも関わる問題として示した。これを受けて桐原氏は、松陰における水戸学から国学への転向について解説した。有徳者が君主になる水戸学・儒学では、なぜ日本が立派で大きな国なのかという説明がつかないなか、松陰は『古事記伝』によって天壌無窮の神勅に辿りつく。そして『古事記伝』や『神字日文伝』などで国学を学び、国学者というにはお粗末な出来ではあるが、国学に影響を受けるようになったのは確かだと述べた。松本氏は桐原氏による国学研究の四象限に触れ、色々な本質論を持つ人間が生産的な対話を行うためのプラットフォームだと受け止めた。また、『近代の神道と社会』で取り上げた藤田徳太郎にも関連して、国学研究をはじめ、どの地域でも文化でもナショナルなものを背負う部分があるため、そこの矛盾や葛藤を地域的・国際的なつながりにおいて考えるべきことを提起した。

次いで、遠藤氏は一戸氏による様々なレベルでの「復古」という問題提起に関連して、近世と近代の連続についてパネリストに投げかけた。この点には松本氏が、最近学部の授業で「国学概論」を講義するなかでは四大人を追いかけるのではなく、同時代性を

踏まえて教えていると述べた。真淵と宣長が出版の順番では逆であること、宣長の次は篤胤・平田派ではなくまずは鈴屋派の時代であること、平田派による足利三代木像梟首事件まで、国学は反幕府であったとは言えず、むしろ契沖・春満・真淵のように、徳川幕府やその周辺が国学成立に寄与していたことなどを教えることで、近代的な国学観による近世国学への思い込みを解く作業を続けているとした。

そして、遠藤氏はフロアからのコメントとして、裵氏に対し、『三国遺事』の檀君神話解釈からエスニックオリジンとしての「古朝鮮」を描きだすという新たな神話の創出と、東アジア国際情勢のなかでの朝鮮の位置との関連についての質問を取り上げ、中国・朝鮮の国学と日本国学との比較について議論した。また、裵氏と蔣氏に対し、中国・朝鮮の国学との比較を考えた際に、四大人を中心とした日本国学の規定はどれだけ妥当なのか、儒家神道や水戸学をどう考えるべきなのか、ということを問うた。

裵氏はまず、檀君神話に関する総督府と朝鮮の知識人との論争に触れた。『三国史記』には檀君が載っていないため、日本の学者は文献批判として、『三国遺事』という出典の弱い檀君神話を歴史扱いしなかった。朝鮮の知識人からすればそれはイデオロギーだが、『三国遺事』が崔南善によって韓国で出版されても、日本人と同じく根拠の弱さを指摘する人はおり、社会主義者も立場が違っていた。日本人学者対韓国人学者という論争の構図では括れない。また、韓国では四大人のうち宣長に研究が集中している上に、源氏物語研究や歌人としての側面ではなく、国体論や水戸学などを中心とする近代の視点を基準にして遡る形で国学が理解されている。他方で、山崎闇斎や藤原惺窩・林羅山は朝鮮の儒学の影響があり、伊藤仁斎や荻生徂徠は朱子学に対する批判であるため、韓国の思想史学界では宣長よりも多く取り上げられているのだという。

蔣氏は、中国における「国学」の起源としては 1920 年代に日本から持ち帰られたという説があったが、最近になって新しい史料から、1897 年に遡れるという新説が出されていることを述べた。とはいえ、「国学」よりも「中国伝統文化」の語を使いたいと言う研究者がいるなど、国学の定義には日本と同じく論争があり、いまだに結論が出ていない。そして、江戸前期の儒家神道と後期水戸学は神儒一致という点においては同じだが、後期水戸学は会沢正志斎や藤田幽谷・東湖・吉田令世のようにそれぞれ考えが異なりつつも国学から刺激を受けているという意味では、儒家神道の神儒一致と後期水戸学の神儒一致は違うものだ、と論じた。

両氏の発言を受け、遠藤氏は「国学」について補足した。日本と韓国では儒学がまずは普遍の文化として共有されていることが前提としてあり、日本ではそこから和学が出てくることで、儒学が特定の中国という場所の学問として解釈される動きが現れ、韓国では「実学」が挟まり、近代日本の問題とも関係していく。それに対して中国では漢学が自国のものなので「国学」という言葉も違うニュアンスになり、同じ言葉でも整理が必要なのだという。

これまでの議論を受けて遠藤氏はフロアからの質問として、海外で日本の文化・思想・歴史に関心を持つ学生や研究者が、国学を今より研究しやすい環境を作るために必要なことを問うた。ベンテリー氏は、氏がこれまで出した二冊の本のように、史料を英訳して

学生が読めるようにすることがよいとし、蔣氏は、帰国してから水戸学や国学に関する史料がないことに不便を感じているため、国学・神道に関する史料のデータベース化を進めてほしいと求め、オカ氏は日本において英語で教えており、翻訳のみならず、注や入門書など、授業にも使いやすく、分かりやすいものがオンラインで必要だと提起した。

最後に補足として、次のようなことが議論された。

林氏は暦研究の観点から、中国が明から清に移ったことの重要性を指摘した。明の大統暦には共感的だが清の時憲暦には反発するように、朝鮮や日本では小中華主義が出てきて、その影響として国学や実学が出てくる。ただ、江戸時代は中国から距離を取るためにも中国の語彙が必要で、思想的なジレンマがあった。近代には文明の中心が西洋になってきて、その基準で作り替えるという新たな問題が出てきて、植民地支配や戦争といった問題とも結びついていくと指摘した。

一戸氏は國學院大學博物館における「好古家」の展示に言及した。近世において刀や土器などを模写したり収集していた好古家は、近代と似ているところもあるが似ているからこそ厄介で、彼らは近代の考古学と同じような心構え・視線で古代の遺物を見ていたわけではない。例えば藤貞幹は実際に目の前にないものを勘で復元的に記述するということをやっており、近代の考古学研究者はそれを偽造だというが、おそらく偽造という意識がそもそもない。近代の学術と似たようなことをやっているが根本の原理原則が違う人たちによって営まれたことであると意識しなければならない、と述べた。

桐原氏は、『神道大系』などをデータベース化し世界的に共有していくことで、これからの国学・神道研究が飛躍的に進むと提起した。

松本氏は、専門分野間のすり合わせ・国際間のすり合わせによって「国学」研究をつなげていくことで、時代の差異や地域の差異を考えていくべきだとして、今回のフォーラム参加者に感謝し、今後もプラットフォーム事業が続いていくことを述べた。

（文責　武田幸也・木村悠之介）